

学認 LMS による研究データ管理に関するオンライン講座試験運用報告書

2019

JPCOAR 研究データ作業部会

学認 LMS による研究データ管理に関するオンライン講座試験運用チーム

1. 実施概要

このチームの 2019 年度の活動は、2018 年度試験運用後に機能向上した研究データ管理に関する教材を、国立情報学研究所 (NII) が開発した学認 LMS に搭載して行う、オンライン講座の試験運用とその検証を目的とした。学認 LMS の Learning Analytics 基盤を使って受講者の実施状況などを確認する組織的運用の試行、2020 年度の正式運用に向けて教材内容の評価も実施することとした。



図 1 学認 LMS のメニュー画面



図 2 「研究データ管理サービスの設計と実践」の動画版の画面



図3 「研究データ管理サービスの設計と実践」の E-book 版の画面

講座内容は「オープンサイエンス時代の研究データ管理」「研究データ管理サービスの設計と実践」の従来の動画版と E-book 版を学認 LMS 上で公開し、22 機関が参加した試験運用を行った。

報告会后に LA 基盤のテストを行う予定であったが、LA 基盤の動作確認等の遅れなどにより応募機関でのテストの実施については今年度の実施を見送り、次年度以降の NII の検討課題とした。

2. 実施

(1) メンバー：木下直（チーフ、鳥取大学）、芝翔太郎（北海道大学）、松野渉（筑波大学）、小野寺千栄（物質・材料研究機構）、古川雅子（NII）、尾城孝一（NII）

(2) 実施スケジュール

- ・ 7月16日 参加機関募集
- ・ 8月23日 募集締切（応募機関：22 機関）
- ・ 9月11日-12日 機関管理者向けの説明会（TV 会議）
- ・ 9月-12月 試験運用
- ・ 12月18日 学認 LMS 報告会（会場：NII）

3. 学認 LMS 報告会

9月から12月にかけて応募機関による試験運用について、個別受講者アンケートと参加

機関報告を集約し、12月18日にNIIの会議室で学認LMSによる研究データ管理に関するオンライン講座試験運用報告会を開催した。

(1)学認LMS試験運用プロジェクト参加機関からの報告（暫定版）

各機関での実施について、機関担当者からの報告をまとめて配布した。

- ・ 研究データ管理やポリシー策定について、取り組みを進めている大学や学内での意見交換を行うなど、少しずつ進んでいる状況が伺われた。
- ・ 試験運用については、学認IdP管理者による設定がスムーズに行われた機関では特に問題はなく、学認IdP管理者との調整や知識不足などがあると、設定に時間がかかった。
- ・ 図書館からのメール等での呼びかけが中心で、参加者も図書館員が多い。
- ・ 受講者からの質問や対応で機関担当者が困難に思ったことは特に報告されなかった。
- ・ 教材の評価では受講に時間がかかる、各動画の時間の短縮などの要望があり、利用した機能では倍速再生をよく使っていることがアンケートでも結果となっており、短い時間で閲覧できる教材が求められている。同様の理由でe-BOOKを高く評価する意見があった。
- ・ 教材の内容と学認LMSの運用双方に多くの意見と要望があり、今後の実装に向けての反映が望まれる。

学認LMS試験運用プロジェクト参加機関からの報告は暫定版としていたが、報告会后にLA基盤の試験運用を実施しなかったため、参加機関に最終報告等の提出の依頼は行っていない。

(2)プロジェクト参加機関からの報告

研究データ管理に向けた各大学の取り組みと今回の試験運用について、試験運用参加機関を代表して京都大学、徳島大学、明治大学、名古屋大学の4つの機関からの報告があった。

各大学の研究データ管理についての報告により、プロジェクト的に始まった取り組みが、次第に全学的な組織となり研究データポリシー策定の検討を行っている状況や、研究データの実態調査や勉強会を行うなど、研究データへの関わりが組織全体へ広がっていることが分かった。

また組織的運用による試験運用については、受講者が多岐にわたり、受講に対する教員の反応や、受講目的の伝達の難しさ、サポート体制の構築についての課題を知ることができた。

4. 受講者アンケートの最終報告

最終的な受講者アンケートの回答者数は44名だった。中間報告の段階では「業務命令」の選択が最多であったが、最終的には「オープンサイエンスに興味があった」「研究データ管理に興味があった」が上位を占めている。

アンケート結果から講義の難易度を見ると、「オープンサイエンス時代の研究データ管理」は第3週「メタデータ・法倫理的問題」の難易度が高いという結果になった。「研究データ管理サービスの設計と実践」では、第4章「研究中の支援」と第6章「日常的な支援」の難易度が高い。しかし LA 基盤による各設問テストの結果分析が今回実施できなかったため、受講者の内容理解の分析までには至らなかった。

アンケートの詳細は別紙資料としているのでそちらも参照されたい。

5. 本試験運用の成果と今後

受講者アンケートと参加機関の報告書により、次年度以降の教材および提供基盤のブラッシュアップに向けた意見集約を行うことができた。また報告会での参加機関からの報告により、データポリシー策定を進めている機関の先進事例や、学内での RDM への関心や知識習得のニーズの高まりを知ることができた。また、各機関によるこの講座の利用者向け案内資料などを共有し、次年度以降に運用を実施する際に参考として使うことができる。

一方、学認 LMS を使った提供については、LA 基盤の試験運用を行うことができず、NII による学認 LMS による正式運用は、2020 年度は見送られることになった。実際に運用するに当たって、教材の閲覧状況やテストによる習熟度の分析など LA 基盤による管理をどの程度必要とするか、さらに議論が必要であると考えます。

この試験運用チームの活動は、今後、教材内容については「若手研究者のための教材作成チーム」に引き継がれ、学認 LMS の運用については NII が担当し実施されることになっている。

【参考】

本試験運用で使用した研究データ管理に関するオンライン講座については、同内容の教材を JPCOAR および NII のサイトで公開している。

- RDM トレーニングツール <http://id.nii.ac.jp/1458/00000023/>
- オープンサイエンス時代の研究データ管理 <https://www.nii.ac.jp/service/jmooc/rdm/>
(「RDM トレーニングツール」を gacco 用に再編成した教材)
- 教材「研究データ管理サービスの設計と実践」 <http://id.nii.ac.jp/1458/00000107/>
(図書館員・URA・ICT 技術職員等の研究支援職員を対象とした教材)